

お土産売場などで、直径3～4cmの卵型をした可愛らしいマスコットを見かけたことはないだろうか。色づけされて耳や尻尾がついているため、すぐには気づきにくいのが、実は胴体に繭が使われている。

岩手県は、かつて養蚕の盛んな地域だった。現在では数少ないが、当時は農家のほとんどが蚕を飼っている時代があった。

村民芸工房の創業者、村田三樹二郎さんも、そんな時代に幼少期を過ごした一人だ。30代後半に旅先でマユ人形を目にしたとき、ふっと当時の思い出が蘇り、繭にちなんだ作品を作ることになったという。

村田さんの作る繭細工は、全て手作り。一枚の板の上に50個の繭をのせ、色塗り、乾燥の工程を繰り返していく。その中でもマスコットに目を描く最後の作業、まさに画竜点睛の部分は、必ず村田さんが行っている。

完成品には共通してユニークな特徴がある。それは、倒してもすぐに起き上がる、起き上がり細工であるところだ。その愛くるしい動作は、試行錯誤を繰り返した末、先端を切って中に5g程度の重りを入れることで実現に至ったという。

作品の対象にもこだわりがある。十二支、ダルマ、雛人形、チャグチャグ馬コと、村田さんが作るの、どれも縁起物だ。「せっか



もり  
おか  
ブランド  
物語

繭

細

工



く買っていただくなら、喜んでもらい大切にしたいくなる物を」との想いが込められている。その種類は年を重ねるごとに増えていき、現在では100種以上に上る。

アイデアマンの村田さんは、繭細工の他にもヒット商品を誕生させている。ひとつは「ぶじくるみ（無事来身）」。クルミは「来る身」という当て字のひらめきから、クルミに顔を描いたキーホルダーを製作。交通安全のお守りとして愛される商品となった。

もうひとつは、「けっちゃん面」。岩手の方言で「逆さま」を意味する名の通り、お面を逆さまにすると違った表情があらわれる。だまし絵で有名なエッシャーに影響を受けて作られたこの面は、魔よけ面として年祝いの贈り物にされている。また、芸術としても高く評価され、小学生用の教科書にも掲載された。

愛情がこもった村田さんの作品の数々。そのほのほのとした表情に、癒されること間違いなし。幸運のアイテムとして、ぜひ身の回りに飾ってほしい。

### 盛岡特産品ブランド認証委員会

〒020-0055 岩手県盛岡市繁字尾入野 64-102  
代表電話 019-689-2201 ファックス019-689-2212